

戦前の女子講義録における独学者の意識についての一考察

関本 仁

キーワード：女性、講義録、通信教育、戦前、教育史、高等女学校、向学心

【要 旨】 本論文では、明治期から太平洋戦争前後にかけて展開されたさまざまな女性向け講義録において、学習者である女性たちはどのような意識をもって講義録に取り組んでいたのか。また、当時において広まっていた思想・言説は、学習者である女性たちの考え方や行動にどのような影響を及ぼし、女性たちがどのようなかたちで対応をみせていたのか。つまり当時の思想・言説と女性たちの意識との連関について分析、考察をおこなう。

さまざまな受験雑誌・教育雑誌などの資料を用いて、彼女たち学習者を講義録へと向かわせた要因がどのようなものであったか、講義録で学んだことをその後の人生にどのように生かすことが出来たのか。各時代における当時の思想・言説と講義録の受講者である女性たちの意識や行動との連関について、制度的問題についても注意しつつ、分析・考察をおこなっていく。高等女学校に対する入学志願者の急激な増加が見られた時代のなかで、少しでも多くの女子学生に対して学習機会を提供するべく発刊された『早稲田高等女学講義』の受講者は、基本的に専門学校入学者検定試験、いわゆる「専検」等の受験・合格、つまり高等女学校卒業資格の獲得という明確な目的を持った者が多くみられた。だが更に高度な内容の学問を求めた者は決して多くはなかった。それは大正期の後半から昭和の初期にかけてという時代においては、高等女学校への進学者が大きな増加を見せる一方で、女子学生を受け入れるべき高等教育機関の絶対数が少なかったことも一因であろう。「専検」へと駆り立てる要因としては、「向学心」という要素を忘れてはならないだろう。それまでより持ち合わせている、あるいは、たとえ出発点としては上のような要因に導かれて学習を始めたとしても、学習をしていくなかで培われた向学心、言うなれば知的好奇心というものは、何物にも代え難い学習への原動力であるに違いないからである。

はじめに

筆者は、戦前における講義録（通信教育）を用いて自学自習を行っていた人々の「学びに対する考え方」が如何なるものであったのかを掘り起こしていく、ということを大きなテーマとしている。つまり、講義録による学習を行っていた者たちがどのようにして学を志し、どのように学び、どのように自らが学んだ事柄をその後の彼らの人生に生かしていったのか、ということである。

本論文では、明治期から太平洋戦争前後にかけて展開されたさまざまな女性向け講義録において、学習者である女性たちはどのような意識をもって講義録に取り組んでいたのか。また、当時において広まっていた思想・言説は、学習者である女性たちの考え方や行動にどのような影響を

及ぼし、女性たちがどのようなかたちで対応をみせていたのか。すなわち当時の思想・言説と女性たちの意識との連関について分析、考察をおこなう。

本論文の先行研究としては、早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』、天野郁夫や竹内洋の論考の他、菅原亮芳編『受験・進学・学校 ―近代日本教育雑誌にみる情報の研究―』（学文社、2008年）においては、講義録を用いて学習していた人たちについて、その学習の様子を含めて触れられているが、「受験・進学」に焦点が絞られており、彼女らの「学び」という行為に対する思いや立場についてうかがい知るには不十分であると思われる。また、戦前における女子教育の思想的背景については、小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、1991年）が示唆的であるが、そもそも学校へ通学することがかなわなかったような、講義録に学ぶ女性たちについて多くの言及がなされているわけではない。

今回の調査・分析をおこなう際に用いる講義録は、明治20年代において『女学雑誌』より刊行された『通信女学』、日本女子大学校を中心として明治末期に発刊された『女子大学講義』、大正11（1922）年から戦後直後まで早稲田大学出版部より刊行された『早稲田高等女学講義』である。

『通信女学』については、女子中等教育が十分に整備されていないなかで、比較的早い段階から女性を対象とする講義録という手段を用いた実践が試みられたという点において特筆に値すると考え、これをとりあげた。また『女子大学講義録』については、その発行の中心となった日本女子大学校は、当時の女子高等教育機関のなかでも100名以上に及ぶ入学者を抱える数少ない学校であった¹。『女子大学講義録』の発行が開始された明治42（1909）年の日本女子大学校入学者は263名であり、この年の在学生数は650人との記録がある²。それに対して『女子大学講義録』第一期である明治42（1909）年4月から44（1911）年3月までの全入会者数が6,762人を数えている³。このように多くの女性たちの学習の場となった『女子大学講義録』を女子中等教育との接続という観点からも分析する必要があると考え、これをとりあげた。さらに、『早稲田高等女学講義』であるが、その発刊の数年前より高等女学校すなわち女子中等教育に対する急激な入学者の増加が見られた。発行初年度より17,810名もの「校外生」を抱えていた⁴が、これは通学課程の高等女学校入学者数に対して3割近くの数字となっている。急激に女子中等教育普及が見られ時期であるとはいえ、未だ大半の女性たちにとって中等教育段階へ進む事は困難であったなか、なおかつ高等女学校入学試験より漏れてしまった女性たちにとっても、これだけの規模の学習の機会が提供された事は看過し得ないと考え、この講義録をとりあげた。以上三つの講義録は、それぞれ明治20年代、明治40年代、大正10年代とそれぞれの時代において広く多くの女性たちに対して向けられ、また官製でない側から発せられた教育活動であるという点も共通しており、これらを比較対象とした。

また、新聞、雑誌記事、演説の記録などから当時の思想・言説を取り出し、講義録受講者を取りまく当時の出来事を参照しながら文献調査をおこなう。そして、受講者の声が寄せられた雑誌、たとえば、『早稲田高等女学講義』の副読本である『女学の友』や、さまざまな受験雑誌・教育雑誌などの資料を用いて、彼女たち学習者を講義録へと向かわせた要因がどのようなものであったか、講義録で学んだことをその後の人生にどのように生かすことが出来たのか。そして各時代における当時の思想・言説と講義録の受講者である女性たちの意識や行動との連関について、制

度的問題についても注意しつつ、分析・考察をおこなっていく。

1. 高等女学校について

学校に通うことのできなかった女子に対する中等教育レベルの講義録についてみていく前に、まずその前提となっている高等女学校がどのような経緯で成立をしてきたのか、概略をふれておきたい。明治15(1882)年に東京女子師範学校附属高等女学校(現・お茶の水女子大学附属中学校・高等学校)が設置され、明治28(1895)年に文部省が「高等女学校規程」を出しており、ここで尋常小学校四年修了の後、六年という修学年限が定められている。こうしたなか、明治32(1899)年2月8日の高等女学校令によって独立した教育令となっており、さらなる制度の整備がなされ四年の修学年限が定められた⁵。男子が学ぶ中学校とは違い、「家事」「裁縫」といった科目が設置されているという特徴があった。これについて、山住正己は「これは高等教育を受けた男子の「教養」に対応するものであり、同じ年齢段階で男子は高等学校の前の中学校であるのに、女子が高等女学校と名付けられたのは、女子にとっては、これが高等な教育内容とされていたからである」⁶と指摘している。これについては、日本女子大学校などの女子高等教育機関設立後の雰囲気からも見てとることができる⁷。その雰囲気については、後述の「3. 日本女子大学校による『女子大学講義』」で述べていく。

2. 明治20年代における女性向け講義録—『通信女学』—

高等女学校令(明治32年公布)が出される以前の明治20(1887)年4月2日に発刊されたものに『通信女学』というものがある。これは、『女学雑誌』という「婦女子の心得となるべき事柄を一切集めたもの」⁸を取り扱った雑誌社から出されたものである。発行者の巖本善治は、明治18(1885)年に開設された明治女学校の経営にも携わっており、第二回目以降の『通信女学』刊行時には、明治女学校の教師が執筆者として名を連ねていた。「通信女学発行の趣旨」の中で巖本は「今四五年の内には、女学の進歩非常にて、おさおさ男子も劣らざる有為の女流を、多く出ださんは勿論、婦人一汎の有様必ず一変して、今の如き交際にては、事足らざるに至るべし、故に、今日に於て、尚ほ学文せざる貴嬢方は、一日も早く学校に入りて、一と通りの修学を為し、決して時勢に遅れざる様に勉めらるべし」⁹と当時の女性の置かれている状況を示し、「一家を脩るには、家内衛生家内経済の事を初めとして、母親たるの覚悟、育児の心得などは、是非とも学び置かでは相成らず、特に又追々開花して、交際の有様も変化する今日に当たりては、文学理学の一斑より、歴史地理の大略、および、西洋女礼式の一と通り」¹⁰の学習の場を提供するとした。学習の対象者は「一家の妻となりて、家事向万端を取扱はるゝ方々」¹¹としている。開設された科目は「女子生理、育児心得、家内経済、文芸案内、万国史略、文学一班、理学一班、家内理学、西洋女礼等の諸科」となっている。明治女学校の教師が『通信女学』の講師として名を連ねていたことからみて、完全準拠とまではいえないまでも、明治女学校で行われていた内容に添ったものと推測する。内容は家政や文芸などの分野の比率が比較的高く、母体の雑誌、そして講義録にも冠されている「女学」、つまり「良妻賢母主義」と「教養主義」を重ね合わせた¹²知識を身につけることに主眼に置いていたと思われる。『女学雑誌』と『通信女学』との関係につい

て、明治23（1890）年開始における告知では、「女学雑誌は其時々に必要な女子の心掛を論じ通信女学には永久女子に入用なる学問を教授す其二つ乍ら欠く可らざるは食物と着物の如し」¹³と表している。講義録は原則毎月一回の刊行で一年にわたって学ぶ、というものであり、明治24（1891）年の次年度開始時告知には「全科を卒業したるもの七百余名あり」¹⁴と記録されている。明治21（1888）年の高等女学校在学者が全体で2,599名¹⁵であることから、その対比としてみても、多くの女性が学んでいたということが出来るだろう。明治26（1893）年以降は『女学雑誌』においても『通信女学』の告知がなされていないため、以後の実態は明らかではない。また、刊行開始直後には『通信女学』誌面に質疑応答の場である、問答叢話というコーナーを設けていた。後にこれは『女学雑誌』の紙面に移ることになる。『女学雑誌』は明治37（1904）年に廃刊となり、また明治女学校は明治42（1909）年に廃校になっている。『通信女学』ありかたについて、田代和久は「成瀬仁蔵の『家庭週報』や『女子大学講義録』こそは『通信女学』を理念の上でも、形態の面でも継承するもの」¹⁶であると指摘しており、また、稲垣恭子は巖本善治が経営に携わった明治女学校を「女子大学へ発展させていこうという理想を実現したのが、巖本善治の明治女学校ではなく成瀬仁蔵（1858-1919）による日本女子大学校（明治34（1901）年創立）であった」¹⁷と指摘している。

3. 日本女子大学校による『女子大学講義』

では、「『通信女学』を理念の上でも、形態の面でも継承するもの」と指摘されている『女子大学講義録』とは、いかなる特色を持った講義録であったのだろうか。次に、明治末期に発刊された、この『女子大学講義』について概略を示しておく。

明治34（1901）年、成瀬仁蔵により日本女子大学校が設立された。その日本女子大学校の大学拡張の役割を担うべく、明治42（1909）年に『女子大学講義』が発刊された。ここでは、この『女子大学講義』についてその概要を検討する。『女子大学講義』各号の奥付に講義録の特色が記載されており、それは以下のようなものである。

本講義の特色

この講義録は婦人に高等なる教育の利益を分ち、たの品格と知識とを進めて、家庭を改善し、生活を幸福にすることを以て目的として編まる。

既に家庭経営の任にあたり更に改善進歩の実を挙げんとする婦人は勿論その準備中の人、修養の志篤く勉学の望み深くして未だその便宜を得ざる人、他の学校に在り又は職業に従事しつゝ、傍ら高等専門の学芸を修めんと欲する人、学校教師家庭教師等にして居ながら必要な智識を補習せんと欲する人、家事其他の教員検定試験の準備を為さんと欲する人、高尚なる社交場裡に周遊するに恥かしからぬ品格と学識とを備へんとする人等の参考として無二の好読物たらんことを期す。

学科は日本女子大学校家政科の科目に準じて、更に趣味ある講演を加へ、講義難易の程度は高等女学校第四五学年の学力を標準とするも勉めて平易を旨とせり。

丁寧なる講義中、猶稍難解なりと思はるゝ語句は別に注解を附し、又自由に質問を許

せり¹⁸。

『女子大学講義』という名の通り、高等教育レベルの内容を持った講義録である。基本として二ヶ年の学習課程を採り、「家庭を改善し、生活を幸福にする」ということが目的として掲げられている。対象者としては、日本女子大学校の卒業生を含めた、家庭経営の中にいるひと、教職等に就いていて、さらなる知識を得ようとする人たち、そして学校で学ぶ機会に恵まれなかった人たちである。ここでは勤労者が働きながら学ぶ場、という意味合いが前面に出ているわけではないように思われる。というのもこの講義録は、日本女子大学校同窓会組織の一つである「桜楓会」が発刊に関わっており、学校を卒業してからも学び続けられる場、という継続教育としての意味合い持ち合わせているからである。講義録の記載に依れば、日本女子大学校の科目に準じているものの、高等女学校高学年のレベルでも対応できるよう編纂されていたようである。受講者数に関しては、「第一期は三回に亘って募集したが、その全入会申込者六七六二名、全修了者一九〇六名、尚、講習中の者が一一七三名あつた」¹⁹と記されている。『日本女子大学校四十年史』では当時の女子高等教育をとりまく状況を「日露戦争後、戦勝国の荣誉と利益を克ち得た反面、国民精神が弛緩し、国民一般浮華文弱の風に靡いたことは争はれぬ事実で、遂に之を憂ひ給うた明治大帝の戊申詔書の煥発と迄なつたのである。世の短見なる識者はその害毒の源の少くともその一部を女子の高等教育に帰し、又高等教育を受くるべき女子をあだかも（ママ）浮華輕兆の権化であるかの如く見做した」²⁰と述べている。こうした状況の中にあった女子高等教育に対する言説、たとえば、当時の文部大臣小松原英太郎が地方長官に対する訓諭では、「特別の事情あるにあらざれば女子が高等の学府に赴くに当らぬ」²¹と述べ、そうした考えが地方長官や高等女学校長へと浸透し、さらには新聞や雑誌媒体の論調への影響を指摘し、この時代を『日本女子大学校四十年史』は、日露戦争の前後を境にして始まった女子の高等教育の「反動時代」と呼んでいる。実際、それまで漸次増加をたどってきた日本女子大学校の入学人数は、日露戦争が終わった明治38（1905）年の547名をピークとして大正4（1915）年の173名まで下降していく結果となった²²。女子高等教育に対する政府世論等の「反動」に遭いながら、講義録の内容の程度を調整するなどの試行錯誤を行っていたようである。

『通信女学』、『女子大学講義』いずれにおいても教育レベルの違いこそあれ、卒業試験を設けるというようなものは無かった。質疑応答についても皆無ではないが、例えば質問について講義録紙面で多くの人たちに周知する、といった形態はとっていなかったようである。あくまでも読み物としての側面が大きく、その意味で「通信教育」としての性格はこれらの講義録においては薄いものと推察する。この2つの講義録に対して、「通信教育」としての様々な要素を持ち合わせたものとして『早稲田高等女学講義』が大正後期に発刊された。この講義録はどのような経緯で発刊されたのか。次章でその分析を試みる。

4. 大正10年代における女性向け講義録 ——『早稲田高等女学講義』——

A. 発刊の経緯

早稲田大学の創設者である大隈重信は、女性に対する教育について、当時の現状を「由来、日本では女子の高等教育は全く閑却せられ、寧ろ無用だと見られてゐる。それが為、女子は天性相当に優れた能力を持つてゐ乍らも、不幸にして教育の機会を十分与へられない。従つてその本来持つ美点長所を思ふやうに發揮することが出来なかつた」と認識しており、「日本の人口は四千万と云ふが、実はその中から女子を除いた残余のもの——二千万人の力が国運発展に資してゐるわけだ。それは能率上の大損失である。故に今後は女子にも、進んで高等教育を与へ、真に四千万の力を正當に伸びさせ」²³ねばならないと述べている。さらに明治43(1910)年に発刊され、大正2(1913)年に改訂された『国民読本』においては、「女子も才能により、進んで専門の学芸を究むべし。境遇によりては、これを以て自ら生計を営み、父母に報じ、夫を助け、子女を養ふべし。蓋し社会公共の事業にして、教育あり、思慮ある女子の力を要するもの、また少なからず。」と述べ、ここでも女性に対する専門教育、つまり高等教育の必要性を訴えている。しかし、その一方で「然れども女子の本分は、主として家庭にあり、女徳の大いなるは、義務の觀念と同情の精神となり」²⁴とも述べており、あくまでも女性の本分は家庭にあるのだ、ということも同時に示している。大隈による女子教育についての言及は決して多くはないが、このような考えが、女子高等教育の普及へと至るその前段階としての高等女学校レベルにおける講義録発行へと導いたのではないかと推測される。

また、『早稲田高等女学講義』が発刊された当時において、女子教育に関し、以下のような記事が『教育時論』に掲載されている。

(前略) 斯くの如き古い良妻賢母を理想とした教育が今日尚続けられて行くなれば、新日本の文化はいつになつても発達しないことは明らかなことである。どうしても男子の文化に對等した女性そのもの、手になる女性文化を建設してゆくことに努力せなければ文化の発達も教育の進歩も見ることとは出来ないのである。

在来の教育思想も教育主義も皆誤つてゐた。男子中心の教育を施してゐた為めに、女子の教者の進歩しなかつたのも無理からぬことである²⁵。

ここに挙げた文を寄稿した市川源三は、東京府立第一高等女学校(現・東京都立白鷗高等学校・附属中学校)校長として活躍しており、この年の4月に発行された『早稲田高等女学講義』でも「修身」のちに「結婚講話」となる科目を担当している。ここに現れている「古い良妻賢母」「男子中心の教育」からの脱却、という考えは『早稲田高等女学講義』の教育内容にも少なからず影響を与えていると思われる。ここで注意しておきたいのは「古い」良妻賢母という語句である。「古い」と述べている以上、「新しい」要素を伴った良妻賢母、という概念を念頭に置いての発言であろう事がうかがえる。では、古くない新しい良妻賢母とはいったいどういう事なのか。このことについての分析は今後の課題とする。

一方、東京専門学校における講義録発刊より主導的役割を果たし、『早稲田高等女学講義』発刊当時早稲田大学総長という立場であった高田早苗は次のようなことを述べている。

（前略）男がこの様にしてどんどん進む世の中に、女ばかりが依然として小学校を卒業した許りで取り残されて居る様では、何うして満足な家庭を作ることが出来やう。何うして健全な社会をこの人々から期待することが出来やう。女性が男性の男々しい事業に対して、完全な知識の上の理解が出来て、そこに始めて円満な家庭生活があり、同時に健全な社会が生まれるのである²⁶。

そして、自らが早稲田の講義録で学び、昭和19（1944）年に至るまで総長として早稲田大学の経営に当たっていた田中穂積は『早稲田高等女学講義』の発行の趣旨として以下のようなことを述べている。

（前略）併し今日の如く女子教育が不振の状態にありましては、如何に男子の教育のみが進歩しましても、健全な家庭を形作することは出来ず、この大切な女子の立場及び教育が閑却されてゐることは遺憾至極なことであります。

早稲田大学出版部が『高等女学講義』を発行して、女子教育の進歩に貢献するため、努力する趣旨は即ち茲にあるのであります。どうか敬愛する諸姉がこの『高等女学講義』を御熟読になりまして、小にしては幸福な家庭を営まれ、また愛児の御教育の参考になさると同時に大にしては国家の健全なる発達にご貢献なさる資料となりますことを私は熱望して已まぬものであります²⁷。

ここで挙げた高田、田中両氏の記述のいずれにおいても共通しているのは、従来教育が男子偏重であったために女子に対する教育がないがしろにされ、「健全」な社会・家庭が形作られていない。その不十分であるところの女子中等教育において多くの女性たちに教育の場を提供するということになるだろう。この考え方は先に挙げた大隈の考え、つまりこれまでは専ら男子に高等教育機会が与えられ、いわば男子にのみ価値をおく「単本位制」であったが、今後は男女いずれにも高等教育が必要であり、そうでなければ社会が成り立たない、といういわゆる「男女複本位論」²⁸に沿ったものだと思われる。そしてこの講義録を学習することによって家庭生活を豊かなものにすることを期待している。ここで注意しておきたいのは、講義録で学んだ先には「家庭の経営」ということがともに重要視されていることである。このことは『高等女学講義』設置科目の中でも、筆頭にあげられていた「修身」が昭和2年度春期開始分より3つの科目に分かれた際に、すべての科目の中で筆頭として「結婚講話」が挙げられ、昭和11年度秋期開始分に至るまで筆頭科目であり続けたことも決して偶然ではないだろう。科目の内容についての変遷・分析等については今後の課題とする。

B. 『早稲田高等女学講義』の性格

『早稲田高等女学講義』についての概略を述べると、大正11(1922)年4月に開講。修了年限は一年半²⁹であり、月謝一円、月2回刊。春と秋の半年ごとに開講している。校外生証(学生証)や徽章が配布され、全課程を終えると修了、ないしは卒業という扱いとなる。これは卒業のための通信試験を通れば卒業となり卒業証書が授与され、最後まで教材をやり遂げることができると修了ということとなり、希望者には修了証書が送られた。さらに「優良なる卒業生」には大学聴講生の受験資格を付与していた。なお、さらに付け加えると、早稲田大学における「通学課程」の女子聴講生の受け入れは大正10年度(1921年)、つまり『早稲田高等女学講義』発刊の前年度からであり、その数12名であった³⁰。また、正規課程での女子学生受け入れは昭和14年度(1939年)からであり、このときには4名の女子学生が入学している³¹。なお『早稲田大学百年史』によれば、戦後の学制改革まで中等教育レベルの講義録刊行は続けられていた³²。

大正11(1922)年1月10日発行の『早稲田学報』323号において、『早稲田高等女学講義』開講の告知が以下のようになされている。

「文化生活の徹底と本大学出版部の活躍 = 早稲田高等女学講義の開講 =」

文化生活は婦人の思想啓発から

婦人に学問が必要かどうかと云ふ問題は、すでに過去のことに属してしまつた。少なくとも現代人が行き詰つた生活の脅威から脱れるには、まづ第一にその家庭の改善を急務とする。而して家庭改善の根本問題は、婦人の智識的覚醒に俟たなければならぬことは勿論である。

(中略)

女子教育機関の不完全

翻つて、わが国に於ける女子教育の現状を視るに、教育の機関は極めて不完全なもので、東京の如き、市内各公私立高等女学校に於ける入学志願者は、年々その募集人員の数十倍に達し、大多数は空しくその志を中途に挫折して、再び従来の無自覚の生涯に帰らなければならぬ。教育の機関の比較的多い東京に於て既に斯くの如くである。況んや地方に於ける子女の困惑は、吾人の斯くの如き思ひも尚且つその半ばに過ぎぬものある如きは想像に難からざるところである。

今や社会は女子に対しても種々の職業を要求している。将来の婦人は、只単に家政上の確信に対して重大責務を有して居る許りでなく、同時にまた人間として生存のための闘士でなければならない。婦人の智的要求の益々徹底的に進み来ることは、蓋し自然の勢とも云ふべきだらう。(中略)

学校教育拡張の必要 女子教育の徹底的普及

こゝに於てか吾々は学校教育拡張の必要を痛切に感ずる。学校に於ける一つの講筵に多数の学生を集中すると共に、一人の独学者に対して、学校に於ける講筵と同様の効果ある多数の講義を読習せしめると云ふことは、文化の益々複雑なるべき将来に於てさらにいつそう必要を認むべきは吾人の確信するところである³³。

女性に学問が必要であることは自明としていることはここから見て取ることができるが、具体的にどのような学問が必要だととらえていたのだろうか。現代の課題として家庭の改善があり、家庭の改善には婦人の智的覚醒が必要としている。これをみると、やはり女性と「家庭」の結びつきが強調されているように思われる。けれども、先述の市川源三は、「古い良妻賢母を理想とした教育」では「文化の発達も教育の進歩も見ることが出来ない」としており、このような考え方が多少なりとも講義録のあり方に反映しているのではないだろうか。講義録を修了しただけでは専門学校への入学資格が得られないため、『早稲田高等女学講義』正規の高等女学校と認められてはいなくとも、学習者にとって必須である正規のカリキュラムに準拠することを勧案していたと思われる。

『早稲田高等女学講義』は、開講の告知にも記されているが高等女学校に入学できなかった女性達の受け皿となることを意図している。実際にどれほどの競争率であったのだろうか。本科入学者に関していえば、この当時おおむね6割弱程度の合格率であったようである³⁴。そのため数十倍というのは少々大げさではあるけれども、当時の状況において志願者の半数近くが合格できない、という事態は彼らにとって決して容易ではなかったはずである。特に、『早稲田高等女学講義』が発刊された前後では4割ほどに合格率が落ち込んでしまっている。何故これほどまでに合格率の下降が見られたのかについてはさらに調査を進めなければならないが、ひとつには大正8年度(1919年)から10年度(1921年)にかけて特に顕著であるが、それぞれの年に3万人の志願者増がみられることがわかる³⁵。入学志願者の急激な増加に対して、受け入れる側、つまり学校側のキャパシティを大幅に超えてしまっていたことが挙げられるのではないだろうか。こうした背景が『早稲田高等女学講義』発刊のきっかけの一つなのでないだろうか。

早稲田大学において、講義録を専門教育、つまりは高等教育レベルから、男子の中学、商業(実業)教育という中等教育レベルへと拡大してきたなかで、なぜこのタイミングで女性向けの講義録が発刊されたのか。「故大隈侯爵の提唱によつて生まれた記念すべき代表的講義録」³⁶という宣伝文句の元に発刊されたのだが、同年の1月、早稲田大学創立者である大隈重信は死去し、大隈講堂建設など早稲田大学内における大きな計画も開始された年でもあった。大隈の思想がこの講義録の発刊にどのような影響を与えているのかについては更に調査を要する。

C. 設置科目について

『早稲田高等女学講義』については現在の処、開設された大正11(1922)年から昭和14(1939)年までの設置科目については判明している。そのなかでも、設置科目については2つに大きく分けることができる。一つは「修身」「国語」「英語」「理科」「地歴」「算術」などであり、もう一つは「家政」「美容」「音楽」「文芸」などである。これに課外講演が加わる形となっている。前者を「学力向上講座」、「基本講座」と呼び、一般の高等女学校のカリキュラムに準じたものになっている。後者は「家庭及趣味講座」、「常識修養講座」、「文芸講座」などいくつかに分かれるが、「基本講座」以外のものとして置かれている。後述する「専検」の科目である「家政」「刺繍」などはこちらに含まれている。なお、当初「修身」として設置されていたものは「結婚講話」、「修養講話」、「公民講話」と別れ、さらに昭和6(1931)年「教育講話」が加わっている。これは「家

庭教育」という意味合いが強い科目となっている。

次に、『早稲田高等女学講義』で設置されていた「科目」の変遷について、カリキュラム全体の中での位置づけがどのようなものであったかの確認することを目的として、開講年である大正11(1922)年から昭和14(1939)年までの設置されている科目のうち、常に筆頭に置かれている「修身」ならびにその後継となっている諸科目についての説明がどのようなになっていたのかを示しておきたい。

『早稲田高等女学講義』は各年度、春(4月)・秋(10月)の2回の開始時期となっている。今回用いた資料はそれぞれの年度の『内容見本』(入学案内)、また講義録本誌などに由っている。なお、それぞれの『内容見本』の発行時期が不明であるため、それぞれの年度開始分、ということで区別をしていく。すべての年度において開講された科目は「主要教科」と「家政」に関する科目の2つに分かれ、さらに科外講演が設定されていた。

大正11(1922)年度春期から大正14(1925)年度春期までにおいて、通常設置科目(名称はなし)と科外(「面白いお話」「教訓になるお話」「修養のお話」「新しい学問についてのお話」「婦人談、家庭談」「その他」というサブタイトルがつけられている。『内容見本』大正11(1922)年春期開始分、35頁)となっている。大正14(1925)年度秋期は資料がないため不明だが、同年度の春期と同様のカリキュラムであったのではないかと推測する。ここまでは、個別の科目ごとについての説明は見られない。そして、「修身」という教科のもと、「実践倫理」とした科目が配されていた。大正15(1926)年度春期では、修身について、「市川、沼田、宮田の三人の有名な先生が個人、社会、国家の三点から見た道徳を親切に説かれた面白いためになる修身講話です。(15頁)」と紹介している。この三名はそれぞれ、市川源三(東京府立第一高等女学校長)、沼田笠峰(頌栄高等女学校長)、宮田斉(成女高等女学校長)であり、この教科だけを見ても、公立私立を問わず、さまざまな講師が関わっていたことがわかる。その半年後である大正15(1926)年度秋期の『内容見本』では、修身講義については、「豊かな人道愛の立場から個人個人、社会、国家の道徳を最も力強く説かれたものです。(10頁)」としており、内容についての大枠を示し始めている。次の昭和2(1927)年度春期『内容見本』では、「更に三つの精神講座」として公民講話、結婚講話、修養講話を開設した。また、これに加え、「五つの新家庭講座」について、「美しい容貌、綺麗な身だしなみは女の生命の一部でもあります。家庭の装飾といふことも主婦の大切な心がけの一つであります。(表記がないため頁数不明)」という見地から、講座を開設したことがふれられている。

結婚講話、修養講話、公民講話についての説明は、「弱い少女や婦人の行くべき道を決かな、而かも力強い言葉で絶えず励まし、導き、自分の行く正しい道、他人と交る道、社会の一員としてとるべき覚悟などを説かれたもので、昭和の新しい御代の新しい婦人道徳教科書として万人に是非ともおすすめる価値のある三つの講話であります。(10頁)」とあり、「婦人道徳」という言葉を用いて、紹介している。

昭和6(1931)年度春期の『内容見本』では、結婚講話、修養講話、公民講話について、「弱い少女や婦人の行くべき道を決かな、しかも力強い言葉で絶えず励まし、導き、正しい道、他人と交はる道、結婚についての知識社会の一員としてとるべき覚悟などを説かれた、昭和の御代

の新しい婦人に必要な修身講話であります。(10頁)」となっており、結婚講話についての言及がなされていることが特徴的である。また、この時点で新たに「教育講話」という講座があらわれる。「この講話は師範学校の教育学と違い、児童心理と家庭教育とを主としたもので、講師倉橋先生はこの方面での實際家で現在幼稚園にあつて御自分のお考へを実際に行はれて居方であります。従つて講義もむづかしい学科でありますが、そこを優しく、解りよく書かれたよい講義です。(同10頁)」この紹介文にもあらわれているように、教育というなかでも、家庭教育に焦点を当てた講座を開設している。これより以前から「育児看護法」という講座が存在していたが、こちらはより技術的な内容になっている。

昭和8(1933)年度秋期になると、紹介文の内容がより詳細になってきており、修養講話では、「人として女として誰でもが行はなければならぬ事柄を(12頁)」扱うとしており、公民講話については、「個人としての修養に努めると同時に、世の中の一員、即ち公民としての義務を果たさなければなりません。(同前)」と紹介されている。結婚講話については、「結婚悲劇」とか「結婚解消」とかいふことは、多くの場合、結婚当事者を始め両親その他周囲の人々が結婚に就いての正しい知識を欠いてゐるために起ることです。この講話はさうした悲劇を未然に防ぐための親切な講義であります。(同前)」ということを述べている。教育講話については、「将来、人の母たるべき女性にとつて、子供を教育するための知識を持つことが如何に大切であるかは申す迄ありません。(同前)」としていることから、内容が家庭教育について多くの誌面が割かれているであろうことが推察できる。

昭和11(1936)年度春期という時点から、「基本講座では女学校で教へる全学科を網羅して、これからの女性として知らねばならぬ知識を与へ、各種の試験を受けるのに必要なことを教へます。(10頁)」というように試験対策、より具体的には「専門学校入学検定(専検)」へと向けた姿勢が見られるようになってくる。

昭和12(1937)年度秋期の紹介文では、公民科講話のなかで、「人生は楽しい。けれども、私達には社会に対する務と、国家に対する務があります。公民科講話は私たちの生くべき社会の實際の姿と、それに処する道が教へられます。(6-7頁)」というように、「国家に対する務め」という言葉があらわれる。これ以前より教育勅語等の影響はあったであろうが、直接的には七月から戦争が始まったことに関係があると思われる。

昭和13(1938)年度春期になるとここから表現に大きな変化が見られる。「世界に比なき皇国の女性として生れた誇りも高らかに、強く、明るく、優しく生きて行く途を、暖かなしかも力強い言葉で教えへ、導きそして励ます女子修身講話。筆を執られるのは日本女子大学の校長として永年女子教育に尽くされる井上秀子先生であります(8頁)」というように、前年から起こった日中戦争を契機とした国民精神総動員運動の影響が明確に現れてくる。

戦後再開された時点ではすでに新憲法が制定され、「修身」の廃止、「社会科」が創設されていたが、『早稲田高等女学講義』では「公民講義」とし、以下のような説明をしている。

本講義に於ては、先ず政治関係のことから始めて、次いで法律、經濟に関する主要な事柄を取扱い、更に進んで社会のこと、教育のことから宗教、思想、文化の面についても、その

大体を示して置きたいと思います。殊に新憲法の問題は、われわれの公民生活においてあらゆる問題の基盤になるもので、最も大切なことですから、特に詳しく述べる予定です。

尚、公民科を学ぶについて、最も大切なことは、学んだことを、十分に咀嚼して、必ずこれを、自分の血となし、肉とすることです。公民科を学びながら、例えば理由なく、選挙権を棄てたり、他人の自由を奪うような態度をとったりしては、何の意味もありません。皆さんはこれを学び、率先して、公民としての態度を示してください。

因に公民科は、最近、学校では社会科として取扱っていますが、本講義は新しい社会科の線に添って講じますから内容に於ては、紙数その他の都合で、地歴関係のことだけは省略します³⁷。

地理歴史分野が省略されたことで「公民」となったことが分かるが、何故組み入れることが出来なかったかについては追って調査することとする。この科目のなかには、「教養」というトピックで文芸、芸能、短歌・俳句、スポーツなどが取り上げられていることも特徴の一つである。

『早稲田高等女学講義』は基本的には高等女学校のカリキュラムに準拠した科目設定となっている。全課程を修了し、「高等女学校」で学んだのと同等の学力を獲得したとして卒業してもなお公的な資格、つまり「高等女学校」の卒業の資格を得ることは出来なかった。であるからこそ、学校としても「高等女学校」の卒業資格、つまり「専門学校入学者検定（専検）」の突破を、対策講座を紙面に提供したり、奨学金を創設するなど、さまざまな形でバックアップしていくことになるのである。戦前の学校における「修身」の位置づけは大きい。『早稲田高等女学講義』でも常に筆頭に置かれていたのはその反映だろう。ただし、高等女学校で行われた「修身」とは大きな違いが一つある。それは「結婚講話」の存在である。高等女学校の修身においても、結婚について扱っているが、たいてい、トピックが数多くあるなかでの一つ、という位置にある。それに対して、『早稲田高等女学講義』では三本ないしは四本の柱が立てられているなかの一柱という存在を示し、昭和8（1933）年の春期まではそのなかでも先頭に位置づけられていることから、この科目が重視されていたことがわかる。ただし、この位置に置かれたのはどのような経緯からなのか、発行側、受講者側どちらの意志の反映であったのかははっきりしない。ただ、担当講師の一人である、市川源三は「結婚講話」の担当者であったことから、彼の意見の反映ではないだろうか。

『通信女学』と『早稲田高等女学講義』において、いずれも学校へ進むことが出来なかった人達を対象にしている、という点、担当する講師陣が女学校ないしは高等女学校、すなわち中等教育学校の教師であったことは共通している。『早稲田高等女学講義』は早稲田大学という高等教育機関主導の下刊行された講義録であったが、担当した講師の大半は様々な高等女学校の教師たちで構成されていた。だが、公私立を問わず様々な学校から参加することになった講師陣に加え、大学教授らもそのスタッフに含まれていたことから、非常に豪華な顔ぶれであった、ということが出来るだろう。『通信女学』が刊行されていた時期は未だ高等女学校の制度が確立していない時期でもあり、既存の学校のカリキュラムに準拠する、というよりも、「女学」を磨くためにこういう分野を学ぶべきだ、という学校側からのメッセージを反映したカリキュラムをとって

いたのではないだろうか。それに対し『早稲田高等女学講義』は既に確立されたカリキュラムに準拠することも念頭に置いている。さらに全科修了／卒業しても公的には認められなかった（これは『通信女学』にも共通する）が故に、目指すことになった「専検」突破が受講者にとって大きな課題となっていたようだ。だが彼女たち学習者のこうした経験は、当時の女性の社会上昇という意味においても重要な要素であったのではないだろうか。

以上見てきたように、終戦後に再スタートを切った「公民科」の講義録を除くと、『早稲田高等女学講義』においては、長い期間「修身」分野において筆頭に配置され、独立した講座として存在した「結婚講話」の位置が非常に高いことが分かった。それは一般の高等女学校の「修身科」では数十あるなかの一課であることとの対比から見てきたものであった。もちろん、高等女学校において軽視されたものであったというわけではないだろう。ただし、実際に学習を始める前の段階の人たちの目に多く触れることになったのは、圧倒的に「修養講話」であった。自己形成をいかにしていくかなど、これこそは身につけておいてほしい、といったメッセージの込められた文言が多く記されていたのである。もちろんこれまで見てきたように、その「修養講話」のなかにおいても、そこかしこに「良妻賢母主義」に貫かれた言葉が見受けられた。当時の制度が確立された後の高等女学校は、先に見たように良妻賢母主義とは切り離すことが出来なかった。しかし、決してそれだけではないだろう。良妻賢母、という根幹が揺らぐことはなかったにせよ、多くの事柄を身につけた受講者たちはさまざまな可能性を見いだしていったと思われるが、受講者各々の考え方の変化がどのようであったかについては今後の本研究においては大きな課題として残っている。

5. 「専検」（専門学校入学検定試験）と講義録との関わり

現在のところという高等学校卒業程度認定試験（通称、高認）にあたる試験となる「専検」つまり専門学校入学検定試験は、中学校（旧制）並びに高等女学校卒業同等資格とされており、『早稲田高等女学講義』を終えても公的には認められなかった「高等女学校卒業」の資格を得るには必須の試験であった。菅原亮芳によれば、「専検」は制度改正により3つの時期区分に分けることができ、『早稲田高等女学講義』が刊行されていた時期はこれらの改正をまたぐ形となっていた。一期目（明治36（1903）－大正12（1923））は男子ならば12科目、女子は修身、国語から家事、裁縫、体操までの9科目を一度の試験で通過しなければならなかった。そして試験を実施するかどうかは各学校に委ねられる形となっており、毎年必ず実施しなければならない、という規定があるわけでもなかった。二期目（大正13（1924）－昭和6（1931））には科目合格制度が導入され、少しずつ合格に進めるようになった。ここで大きな転換が図られる形となっている。一つには、先に述べたように、科目合格制度（合格証書を交付する）が導入されたこと、第二には、実施主体が文部省（当時）となり毎年少なくとも1回実施することとなったこと、そしてその出願期間や試験期日、場所は官報公示であったこと、第三には、検定料が5円から7円に増額となり、若干の負担増となったこと、そして第四には、正規の中等教育機関で履修取得した学科科目中1科目あるいは数科目につき、中学校あるいは4年制の高等女学校卒業者と同等以上の学力がある者と認定された場合には、その該当科目は試験を免除することとなったことである。こう

してみると、「専検」はこの時点において国家試験制度となったといえることができるだろう。三期目（昭和7（1932）-）は夜間高等女学校に「専検」指定が認定された時期である。とはいえ、合格にはかなりの困難を極めたようで、『早稲田高等女学講義』の内容見本や『女学の友』なる副読本に多くの「専検」受験の体験記が掲載されている。なお、専検合格者などを対象とした奨学金の制度が存在していたようである³⁸。

菅原亮芳は、当時の講義録学習者が「専検」へ力を注いだ動機として、以下のような指摘をしている。

第1に、主として経済的事情から正規の中学校へ進学できなかったことに対するルサンチマンが、基層にある。第2に、中学校卒業の学歴をもたないと社会で充分な処遇を得られないことに対する不満や焦燥感が、受験を思い立つバネとなっているのである。このことは、大正中期には、すでに、中学校や中卒の学歴が、誰にとっても手を伸ばせば届く範囲にあるものと思われるほど身近なものとなり、逆にそのために、それをもたないことが、様々な社会的場面において、不利に働くことと認識されていることを示唆している³⁹。

女性の社会進出が現れてきた時期というなかではあったが、第2の点においては男女で周りのとらえ方が若干違っていた所はあるかもしれない。だが、それぞれの点において、男女ともに共通して少なからず持ち合わせていた要素であるように思える。ただ、学習者を「専検」に向かわせた要因は本当にこれだけなのであろうか。昭和期になってきてから顕著に現れてきた「向学心」という要素⁴⁰は決して軽んじてはならない。

6. 受講者の様子・意識について

「早稲田高等女学講義」を受講していた人たちはどのような状況で学習をおこなっていたのであろうか。それを知る手がかりとなる資料がいくつかある。先行研究では、菅原亮芳の「『受験界』—「専検」合格体験記の整理を手がかりに—」が挙げられる。これは、「専検」合格に至った者たちがどのように学習を行っていたのか、その体験談が多く寄せられており、どのような学習形態であったのか、どのような教材を用いていたのか、ということについてもふれられているという点においても貴重な資料であるといえる。「最も人気の高かったのが、『早稲田中学講義録』で、次いで『大日本国民中学講義録』である。中学校の教科をオールラウンドに学習するにはこの二つの講義録が最適であったのだろうが、それ以外に特定の科目についての講義録としては、研究社の『英語通信講義録』が比較的良好に利用されたようである」⁴¹という指摘がなされており、またその一方で、「講義録は随所に使用されているが、全面的にはそれに依拠して受験勉強をしてはいない」⁴²との分析をしている。中等教育における学習内容を網羅的にカバーしていた講義録ばかりではなく、特定の分野に絞った講義録というものも多数出版されていたこともこのような分析結果が出た要因の一つになるのであろう。ただ、菅原が用いた資料は男女ともに読者となっていた『受験界』という雑誌であり、実際女性の学習のようすを語った投稿などもいくつか含まれている。しかし、多くの言及が男性学習者になされており、当時の女性の置かれてい

た状況というものがかくみ取られていないようであった。そこで、女性の講義録学習者がどのような学習を行い、どのような進路へと進んだのかについてふれられている記事をいくつかとりあげてみる。もちろんここに示した例が女性たちの独学の有り様を余すことなく網羅しているとはいえないが、上級学校へ進むことができなかったけれども、それぞれの目標へと向かって努力しているようすをうかがい知ることができるといえるだろう。

兄の看病をしつつ尋准へ

福島県 H.Y

小学生卒業後、私は熱心な師範学校の志望でありましたが、幼いとき父を失った私の家はあまりに貧しくてそんな余裕はありませんでした。然し何んとかして教員になりたいと思ってたある日のこと、この講義録の広告を見出し、救ひの神と嬉しく感じそれから暇々に学んで居りました。所が郡山市にて病床に寂しく暮らして居る兄のことを知り、看病して上げたい一念から郡山に出て看護婦の役から炊事洗濯の手伝等をしながら少しづつ準備し、宇都宮でその年の秋尋常科准教員の検定を受検しました。それが幸運にも合格することが出来ました。

農事の傍講義録で

埼玉県 K.S

貧しい農家に生まれた私は、何時も忙しい日を送つて居るため家事のわづかな暇を見て学ぶより外仕方がありません。昼は農事に、夜は遅くまで母の手伝をするので、机に向ふ時間なんか、うつかりして居るとありません。それに昼の疲れですぐ眠くなります。それを引きしめ五燭の電燈の下で講義録を夜ふけまで勉強し、いよいよ試験が近づいた頃は眠らずに勉強しました。そのお陰で埼玉県庁にて受けた裁縫専科正教員の試験に運よくも合格することが出来ました。これも早稲田高等女学講義のお陰と感謝して居ります⁴³。

この二つに共通するのはいずれもまず高等女学校への道へ進むことができなかったけれども、何とか仕事と学習の両立をこなし、教員への道を進もうとしている様子がうかがえる。

専検に合格した人々

香川 F.W

激しい試験地獄を突破して羨望の瞳に送られて県立高女に入学し得た喜びも束の間世を挙げての不況に苛げられて行く私たち小商工業者の家庭の苦しさ、やむを得ず恥ずかしさも悲しさもこらへて中途退学したのが昭和四年七月でした。そして少女倶楽部の広告によつて早女講の存在を知った私はその年の十月第十六回生として入学し、幼妹の子守、家事、裁縫の暇を拾つて僅かに勉強いたしました。かくて昭和六年九月、講義録を卒へると同時に専検に応じ、国・数・修・体の四科目に合格しました。これに力を得て、七年九月再び試験に応じました。戦く心で官報の発表を見、合格者氏名の中に自分の名前を見出した時は実に感慨無

量でした。退学当時の悲しさ恥ずかしさはすべて清算されてしまひ、勇氣は百倍して目下より高き理想に向つて邁進してゐます⁴⁴。

こちらは、六割強の合格率という状況のなか、高等女学校に進むことはできたものの、折しも昭和恐慌のさなかでやむなく中途に退学せざるを得なかった女性が、家事その他の仕事をこなしつつ、少しずつ各科目の合格を積み重ねた、といった様子がうかがえる。

失敗の跡を顧みて

高知 K.I

早女講に育まれ、つさゝやか歩を続けてまゐりまた私、失敗しつゝも努力を続け、遂に昨年七月裁専正に合格することが出来て只々感慨無量でございます。

私は高等小学を卒業してから実業公民学校へ入学いたしましたが、或る時新聞紙上で早女講のある事を知り、第十四回生として入学致しました。そして「女学の友」に出る先輩方方の奮闘談に動かされて私も裁専生の受験を思いたつたのでした。

昭和四年四月学窓を巣立ちいよいよ五月の試験にのぞむ決心を致しましたけれども、何一つ準備のない私、殊に五月と言へば当地方は養蚕の多忙期の事と思ふ様に勉強は出来ず、運を天に委せて試験場に臨みましたが、やつぱり駄目でした。裁縫の可良証明書を得たのみでした。

翌昭和五年五月三十一日必勝を期して試験場に臨みました。すると、六月二十八日、「七月七日実地試験及び身体検査ノ為女子師範学校附属小学校ニ出頭セヨ」との報に接しました。早速母校へ行つて早速実地教授を見学させていたゞきました。そして七月七日いよいよ女子師範附属小学校に出頭いたしました。その日の受験生は私とも四人でございました。かくて七月三十日の発表に自分の名を見出した時、独学者ならではの味はれない深い感激に打たれました。(後略)⁴⁵

当然のことながら、講義録を受講していたものがみな成功を掴んでいたわけでは無い。『早稲田高等女学講義』のみならず、ほかの各早稲田大学講義録にも共通することであるが、体験談は成功談ばかりが掲載されていたわけではなかった。こちらでとりあげたものは結果的には成功を掴んだ例となっているのだが、失敗した、という体験談もしばしば掲載されていたのである。失敗談を載せることは、出版の営業として考えればネガティブな要素であり、極力排除しようという力が働きがちであるように思える。しかし、こうした失敗の体験談というの、こうしてはダメだ、という反面教師としての意図を持って掲載をしていたのかもしれない。

一年半という短い期間で学習をすることが『早稲田高等女学講義』を受講する基本線であるが、必ずしも皆がそうしていたわけではないようだ。単に参考書の一つとして利用していた人、最後までやり遂げることが出来ず挫折した人などは現在のところ、実数は確認できていないが、かなりの割合で存在したであろう事は想像に難くない。様々な要因で講義録の学習を妨げられた人の中にはたとえば、「私はこの講義に入学してから早や三年になります。入学の当時は専検をもと

思ふ程の意気込みで居りましたが、震災の時に一度に溜つたため読みこなせなくなつてしまいました。其後昨年五月に家庭に入り、多忙のために手を付けることが出来ませんでした。家は呉服商ですが、然し以前の失敗を思ふて今度は是非思ひ立つた事を仕遂げたい堅く心に誓つて居るので御座います。(後略) 失名⁴⁶というように、震災などの不幸に見舞われながら、時間がかかっても勉強をやり遂げようとする意志がうかがえる。また、『早稲田高等女学講義』に付属していた『女学の友』という雑誌には受講者の質問に対する講師の解説、進路・受験などの相談の他に、「衛生問答」という、心身の悩み相談を行っている。例えば、「風邪を引き易い」や「ソバカスの療法」⁴⁷などである。十代の多感な年頃にあつて、孤独に学習を続けている受講者にとってこのような悩み相談は有り難い存在であつたのではないだろうか。

まとめにかえて

高等女学校に対する入学志願者の急激な増加が見られた時代のなかで、少しでも多くの女子学生に対して学習機会を提供するべく発刊された『早稲田高等女学講義』の受講者は、基本的に専門学校入学検定試験、いわゆる「専検」等の受験・合格、つまり高等女学校卒業資格の獲得という明確な目的を持った者が多くみられた。また、それに対応して講義録の内容は、「専検」の問題が掲載されるなど、専検対策にある程度の紙面が割かれていた。そして前述のように資格試験合格者に対しての奨学金制度なども用意されていた。中には東京女子医学専門学校などへ進むものもいたようだが⁴⁸、小学校教員検定試験などを経て、学校の教員などの職に就く者も多かった。それに対して、更に高度な内容の学問を求めた者は決して多くはなかったようである。それは大正期の後半から昭和の初期にかけてという時代においては、高等女学校への進学者が大きな増加を見せる一方で、女子学生を受け入れるべき高等教育機関の絶対数が少なかったことが一因ではないだろうか。例えば女子学生が『早稲田高等女学講義』を「卒業」した後に、早稲田大学の通学課程へと進んだとしても昭和14(1939)年度までは聴講生としか扱われず、本格的な学問をすることができない状況にあつたのである。また、「不必要な知識を与えている」というような、女子の高等教育機関に対しての偏見が根強く存在していたことも影響していたのではないだろうか。ただ、「専検」へと駆り立てる要因としては、菅原が挙げていた「主として経済的事情から正規の中学校へ進学できなかったことに対するルサンチマン」と「中学校卒業の学歴をもたないと社会で十分な処遇を得られないことに対する不満や焦燥感」にのみ注目するのではなく、「向学心」という要素を忘れてはならないだろう。それまでより持ち合わせている、あるいは、たとえ出発点としては上のような要因に導かれて学習を始めたとしても、学習をしていくなかで培われた向学心、言うなれば知的好奇心というものは、何物にも代え難い学習への原動力であるに違いないからである。

『通信女学』の受講者、内容についても不明な点がいまだ多く、『女子大学講義』については、中等教育と高等教育というレベルの違いはあれ、設置されていた科目についてはどちらも家政について扱っていたこともあり、「実践倫理」、「教育学」、「衛生学」、「法制」、「家事」、「料理」、「裁縫」など重なる分野は多い。また日本女大学の校長である麻生正蔵が、早稲田大学総長の高田早苗と並んで「指導」という中心的な立場で『早稲田高等女子講義』に参加していたことも大き

く影響を与えていたであろう事は推察できる。ただ、先に述べたように『通信女学』、『女子大学講義』ともに通信教育の教材というよりも寧ろ「読み物」としての性格が強い。それに対し、『早稲田高等女子講義』は校外生証（学生証）や徽章を配布し、質疑応答の場を設け、希望者には卒業試験を課すなど通信教育の体裁を多く持っていた。今後の課題としては、『早稲田高等女学講義』に学ぶ人達を取り巻く状況について、当時の情勢などを新聞雑誌等や彼女たちが自らの学習の様子についての報告を投稿していた雑誌記事などを参照しながら、彼女たち学習者を講義録へと向わせた要因がどのようなものであったのかについて分析をしていく。そして多くの事柄を学び、そのことによってさまざまな可能性を見いだしていった受講者たちが、各々の考え方をどのように変化させていったのか。学習者たちのニーズ、講義録を発行している学校側の意図双方に注意しつつ、さらなる分析を試みたい。

注

- 1 佐々木啓子「伝統的規範から脱却した新中間層の女性たち - 戦前期日本における女子高等教育拡大のメカニズム -」香川せつ子 河村貞枝編『女性と高等教育 - 機会拡張と社会的克己 -』昭和堂 2008年、217頁。
- 2 中村政雄編『日本女子大学校四十年史』日本女子大学校 1942年、付録より。
- 3 同前154頁。
- 4 「早稲田大学報告」『早稲田学報』346号、1923年12月、35頁。
- 5 「高等女学校令」（明治三十二年二月八日勅令第三十一号）より
第一条 高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トス
第九条 高等女学校ノ修業年限ハ四箇年トス但シ土地ノ情況ニ依リ一箇年ヲ伸縮スルコトヲ得
第十条 高等女学校ニ入学スルコトヲ得ル者ハ年齢十二年以上ニシテ高等小学校第二学年ノ課程ヲ修リタル者又ハ之ト同等ノ学力ヲ有スル者タルヘシ
- 6 山住正己『日本教育小史』岩波書店 1987年、72頁。
- 7 「女子の教育は高等女学校を以て事足れりとし、それ以上は無用有害なりとの言を吐く者が多々生ずるに至り、それかあらぬか新聞か雑誌に、女子の高等教育は少数の不幸な女子の受くべきもので師範学校の生徒も不幸であるがその中でも教育に従事するはまだしも優れる方で、我国唯一の自由なる女子教育を受くるといふ女子大学の卒業生は、先づ其の価値は下女頭になる位のものであるといふやうな兒戯に類する誣説さへ報ぜらるるに至つた。」
前掲書『日本女子大学校四十年史』148頁。
- 8 『女学雑誌』第73号 1887年8月27日発行、付録より。
- 9 『通信女学講義』1号 1887年4月15日発行、1-3頁。
- 10 同前。
- 11 同前。
- 12 稲垣恭子『女学校と女学生』中央公論新社 2007年、177頁。
- 13 『女学雑誌』194号 1890年1月1日発行、告知より。
- 14 『女学雑誌』246号 1891年1月1日発行、告知より。
- 15 文部省第十六年報「明治21年官公私立高等女学校一覧表」より。

- 16 田代和久 「第4章 女子講義録の世界：『女学雑誌』の一点描（第一部 講義録の世界、近代化過程における遠隔教育の初期的形態に関する研究）」『研究報告』67号 メディア教育開発センター 1994年、118頁。
- 17 前掲書『女学校と女学生』182頁。
- 18 女子大学通信教育会編『女子大学講義』第二学年第十四号 精美堂 1910年10月20日、奥付より。
- 19 前掲書『日本女子大学校四十年史』154頁。
- 20 同前 149頁。
- 21 同前 148頁。
- 22 同前 付録、入学生数より。
- 23 日本女子大学校第一回創立披露宴 1897年3月25日より。大隈重信は日本女子大学校創立委員長であった。なお、実際の日本女子大学校の開設は1901（明治34）年4月20日である。
大隈侯八十五年史編集会編『大隈侯八十五年史』第二巻 1926年12月、699頁。
- 24 大隈重信『改訂 国民読本』丁未出版社・宝文館 1913年、184-185頁。なお、この部分（第五篇 国民の教化 第二章 女子の教育）は初版（1910年刊）には収められてはいない。
- 25 市川源三「教育の社会化と女子教育」『教育持論』1342号 開発社 1922年7月25日、6頁。
- 26 『早稲田高等女学講義』臨時増刊 1926年4月開始分より。
- 27 『早稲田高等女学講義』臨時増刊 1935年10月開始分より。
- 28 前掲書『大隈侯八十五年史』において、「（前略）けれども今日は男女複本位でなければ、社会の進歩、文化の向上を望むことが出来ない。貨幣は金本位でも宜からう。が、社会は一方だけの単本位では立ちゆかぬ。今後の日本は男女複本位とし、女子に高等教育を授けて、婦人の知識を高め、その徳操、人格を完成し、社会上種々の方面に、その能力を出来るだけ多く發揮せしめねばならぬ（698-699頁）」という意見を明治30（1897）年の日本女子大学校創立の宴の際に大隈が述べている。
- 29 1927（昭和2）年4月開始分から1929年10月開始分までは修業年限は1年となっていた。
- 30 『早稲田学報』318号 1921年8月、8頁。
- 31 『早稲田大学百年史』第3巻 早稲田大学出版部 1987年、805頁。
- 32 『早稲田大学百年史』第4巻 早稲田大学出版部 1992年、556-560頁。
- 33 『早稲田学報』323号 1922年1月10日、23頁。

先に附した文章に続いて以下のような特色が記されている。

講義録の特色

- 一、早稲田高等女学講義は、各特色ある高等女学校二十余校の代表的女子教育家が、実地経験によれる忠実なる執筆にして、事実に加て早稲田大学を背景とする一大高等女学校を現出したる観がある。
- 一、講義に興味を多からしむるために、各科とも記述に細心の注意を加へ、これを渾然統合したる編輯ぶりは、蓋し講義録界に於ても新記録をなすものだらう。
- 一、現に教鞭をとりつゝある實際家の、親切にして平明なる講義であるから、小学校程度の学力ある女子にとつて最も適当なる教科書であるとともに、高等女学校の生徒にとりても、座右に備へて信頼し得る立派な参考書である。
- 一、毎号所載の二十四頁乃至三十頁の『付録』は、本講義編輯者が特に苦心を加ふところで、有益にして趣味深きことは、幾多婦人雑誌の精美を聚めたる観がある。従つてその出現は、

女子教育界並びに読書界から多大の期待を寄せられて居る

34 公立私立高等女学校入学志願者、入学者、入学者の割合。なお、本科生のみ記載した。

(文部省 第四三、四六、五〇、五二、五七、六二年報より作成)

	本科	入学志願者	入学者	志願者に対する 入学者の%
明治44年度		27,913	16,331	58.51
明治45年度／大正元年度		30,430	17,643	57.98
大正2年度		30,981	18,212	58.78
大正3年度		31,545	18,608	58.99
大正4年度		32,134	19,265	59.95
大正5年度		35,002	20,469	58.48
大正6年度		39,407	22,299	56.59
大正7年度		42,810	24,411	57.02
大正8年度		54,376	27,059	49.78
大正9年度		83,070	34,688	41.76
大正10年度		112,361	45,238	40.26
大正11年度		122,275	55,928	45.74
大正12年度		131,685	64,282	48.81
大正13年度		135,422	70,347	51.95
大正14年度		141,464	74,689	52.8
大正15／昭和元年度		144,943	78,951	54.47
昭和2年度		145,334	81,379	55.99
昭和3年度		139,339	73,820	60.16
昭和4年度		130,799	84,060	64.27
昭和5年度		125,494	82,036	65.01
昭和6年度		119,223	79,138	66.38
昭和7年度		132,174	84,049	63.59
昭和8年度		147,469	89,384	60.61
昭和9年度		159,559	93,917	58.86

高等女学校研究会編 高等女学校資料集成 第12巻 統計年報編 大空社 1990年

35 同前。

36 『早稲田高等女学講義』 内容見本 1922年10月開始分、34頁。

37 「公民科について」『早稲田高等女学講義』 第19号 1948年2月5日発行。

38 専検試験全科合格者には金十五円など。『女学の友』 8月号 1927年8月15日、47頁。

39 菅原亮芳「『受験界』－「専検」合格体験記の整理を手がかりに－」『受験・進学・学校－近代日本教育雑誌にみる情報の研究－』 学文社 2008年、134頁。

40 前掲書「『受験界』－「専検」合格体験記の整理を手がかりに－」127頁。

41 同前 124頁。

42 同前 134頁。

43 『早稲田高等女学講義』 内容見本 1931年－1932年、26頁。なお、『早稲田高等女学講義』 内容見本 については、正確な発行日が不明なため、上記のように表記した。以下もそれに従っている。

44 『早稲田高等女学講義』 内容見本 1933年－1934年、26頁。

-
- 45 『早稲田』 四月号 早稲田大学出版部 1932年4月、40頁。
 - 46 「談話くらぶ」『女学の友』 7月号 1927年7月15日、61頁。
 - 47 『女学の友』 8月号 1927年8月15日、49頁。
 - 48 「草深い田舎から医専に」、「専検、教員から医専へ」など。『早稲田高等女学講義』 内容見本 1930年10月開始分、26頁。